アジア・アフリカ地域研究 第 21-2 号　2022 年 3 月
Asian and African Area Studies, 21 (2), 2022

フィールドワーク便り

紫のサリーに誘われて

柏　　美　紀 *

帰国前日．私はシンガポールとの国境にほど近い，マレーシア南端の街にいた．急速な経済発展に伴い数を増すショッピングモールを後目に，私はローカルな屋台を求めて彷徨っていた．炎天下で延々と歩き続け体力が限界に近づいた頃，光を浴びて美しく輝く紫のサリーに目を奪われた．ふと顔を上げると，ゴープラム [1]（*Gōpuram*）があった．

「付いてきて.」初めて近づくヒンドゥー教寺院の前で躊躇している私に，そのサリーを纏う女性が声を掛けてくれた．

一歩足を踏み入れた先には，見るもの聞くもの全てが鮮やかな世界が広がり，胸が高鳴った．「これは何？あれは？」ひとつひとつの疑問に丁寧に答えてくれる彼女との会話は，次第に身の上話になった．

写真 1　ゴープラム

彼女が故郷を離れてこの街へ越してきたのは，清掃の仕事で毎日シンガポールに通うためであった．マレーシアで人口の約 7 割を占めるマレー系を優遇する政策の影で，インド系は社会・経済的弱者となる場合も少なくないという．

作業着に着替えシンガポールへと向かう彼女を見送る私の頭は，これまで進めてきた調査を忘れ，「インド」でいっぱいになっていた．

新しいテーマで再び現地へ

帰国後，私は「インド」関連の文献を漁るなかで，とある 1 冊に惹かれた．16 世紀頃交易のためにマレー半島に到来したインド系商人の末裔とされる，プラナカン・インディアン（*Peranakan Indians*）に関する本だ．私は，マレーシアとシンガポールに居住する，数百人ほどのマイノリティである彼ら

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）南インド風のヒンドゥー教寺院に見られる塔門.

を研究テーマに据えた．

2020 年 1 月末，まずはプラナカン・インディアン協会のあるシンガポールを訪れた．しかし，事前に協会宛てに送ったメールの返事は来る気配がない．さらに，協会の住所を辿り開いた扉の先にあったのは，古びた映画館…．「どうしよう…．」

シンガポールに滞在できる期間は 10 日ほど．私は少しでもプラナカン・インディアンや現地のインド系に関する情報を収集するべく，まずは近場のヒンドゥー教寺院を訪ねた．

寺院のスタッフを名乗るインド系の男性に迎え入れられた．中を案内してもらっていたが，その話は段々と辻褄の合わない部分が多くなり，私は違和感を覚え始めた．ついに彼は口を割った．「実は無職で，マレーシアから頻繁に訪れては観光客を相手にガイド等をして生活の足しにしている…．」

私はその後リトル・インディアへと場所を変えて聞き込みを続けた．観光客の集う場所から少し離れたところに，行列を発見した．無料の食事を振る舞っていると聞き，私は思い切って手伝いを申し出た．厨房に通されると，インド系シンガポーリアンのボランティアスタッフ数名が，数百食をこしらえるために手際良く作業している．

私はシーク教徒の男性と，コンテナ 2 つ分のオクラの下処理に勤しみながら情報を得た．

「ここには，シンガポールの建設現場などを支える，主に南アジアからの出稼ぎ労働者が多く集う．彼らは少ない収入を少しでも多く故郷の家族に送金するために，自らの生活費は切り詰めている．」

廃棄予定の食材を基にした無料の食事，といっても侮ってはいけない．どの宗教を信仰する人でも味わえるよう動物性食品などは使用せず，かつ健康のために油脂や塩分は控えられた出来立ての美味しい食事，というこだわりっぷりだ．

その日の作業が終わったあと，シーク教徒の男性に近くのシーク教寺院を案内してもらった．そこでも無料の食事が振る舞われ，人々の生活を支えていた．

写真 2　厨房

写真 3　振る舞われる食事

迫る出国日

目覚めると，外はバケツをひっくり返したような土砂降り．仕方なくオフィス街にある滞在先の目の前の屋台で聞き込みを続けていると，とある貿易会社に勤めるシーク教徒の男性に出会った．私はこれまでインド系といえばリトル・インディア，と勝手に連想してしまっていた．しかしそこは今，観光客や出稼ぎの人の拠点と化しており，インド系シンガポーリアンはオフィス街にいることも少なくないようだ．

その後も情報収集を続けた私はついに，プラナカン・インディアン協会の場所を特定することができた．出国を明後日に控えた日のことだった．

辿り着いた先は，とある会社のオフィス．足がすくんだが，ここまで来て引き下がるわけにはいかない，と扉を開けた．秘書に事情を伝えると，「プラナカン・インディアン協会？　ああ，この会社の社長がやっているのよ」と，出先の社長兼協会長を呼び寄せてくれることになった．緊張が高まる．現れた協会長は私を警戒しつつ，「忙しいんだけど」と不機嫌な様子．ますます脈が早まる私．

それでもこれは私にとって念願の機会．迷惑は承知で部屋に通してもらった．窓を覗くと，これまで見上げてきたマリーナ・ベイ・サンズ[2]が眼下に小さく見える．私は緊張よりも嬉しさが勝り，これまで調べてきたプラナカン・インディアンの情報や，熱意を伝え始めた．すると，こわばっていた協会長の表情が和らいでいく．「なんでそこまで知ってるんだ！」と，ついに協会長は笑い出した．

「明日，自宅でパーティーを開くからおいで．親戚や協会メンバーなど多くの人が集まるから，インタビューするといい．」

協会が出版した本やCDなどたくさんのお土産を手に，興奮しながらオフィスをあとにした．

「社長宅のパーティーでインタビュー…」カプセルホテルの一室に戻ってふと我に返ると，これまでに感じたことのないほどの緊張が押し寄せた．不安を少しでも和らげようと準備を進めようとしたが，震える手が邪魔をする．そんな私を救ってくれたのは，ホテルのスタッフの方々だった．いつもどおり気さくに話してくれ，私の名刺のコピー作業を手伝ってくれた．その後バングラデシュから来ていたスタッフのひとりに，勉強を教えてくれないかと頼まれた．これまで満足な教育を受けることが出来なかったという．

いざパーティーへ

プラナカン・インディアンは華人やマレー人とも混血し，独自の文化を築いてきた．マレー語，タミル語，福建語混じりの独自言語はその一例だ．しかしそれを理由に彼らは，現地のインド系社会から仲間外れにされてきた．「民族の違いに囚われないでほしい．皆同じ人間じゃないか．」差別に苦しんできた協会長の言葉には重みがある．

協会長の妻は華人で，この日は旧正月を祝

2）マーライオンと並び，シンガポールのランドマークとなっている複合施設．

うパーティーだった．シンガポール各地から集った，さまざまな民族，宗教，性別，世代の人々が談笑する．住み込みの家政婦の手も借りながら，多様な宗教の食の禁忌に配慮された食事が振る舞われる．

プラナカン・インディアンに嫁いだ華人の女性は，熱心に協会長や高齢者の話に耳を傾けている．その一方で彼女の娘は華人としての意識が強く，「タミル語は学校で少し習ったけど，忘れちゃった．」

博物館の学芸員の姿もあった．「プラナカン・インディアンの文化は，失われつつある．博物館のバックヤードに保存している資料を，ぜひ見に来て．」

帰路は，協会メンバーの夫妻に車で送ってもらった．車を所有できる人は，国土が狭く税金も高いシンガポールにおいてはあまり多くないようだ．

「おかえり」あのバングラデシュからのスタッフが迎えてくれた．緊張の糸が解けてぐっすりと眠りについた翌朝，「未知のウイルス」の影が迫るなかで私はシンガポールをあとにした．

写真 4　自宅のパーティーの様子

当初，協会からメールの返事がなかったのは，送付先が古いアドレスのためであった．しかしそのおかげで私は，現地社会において少数派で見過ごされてしまいがちな「インド系」に括られるさまざまな人に出会うことができた．関わって下さった全ての方々に感謝したい．

また，シンガポールで新型コロナウイルスは，格差を露呈させた．感染者の大多数が外国人労働者で，彼らの住む劣悪な環境が浮き彫りとなった．彼らの無事を祈念している．